

「井上円了と西洋思想」研究はしがき

西 義 雄

東洋大学創立百周年を記念して五六年前から学祖井上円了博士の研究が三部門に分かたれて進められてきていた。周知の如く、明治大正時代には、東都の私立大学に就いて、三田の経済、早稲田の法律、白山の哲学などと呼ばれ、東洋大学は私学として、早くから可なり有名であった。慶應の福澤、早稲田の大隈の学祖研究は盛んで且つ充分な成果もあげられていたが、東洋の井上に関して、前二者に比して其の研究が充分であったとは言えない観があった。勿論、研究されてはいたが、洋大学祖の人物観が、前二者に比し可なり茫洋としていた感じは免れなかった。其の理由は、哲学が諸学の本であるとせられるから、円了の著作も、哲学・心理・教育・社会・宗教等々と多方面に亘り幅が廣い上に、其の数も単行本だけでも百三十有余に及ぶ多量であり、従って入手の困難のためもあったからであろう。筆者は昭和の初めから直接間接に洋大に関係を持ち、学友も多いので、既に二十数年前から学校当局の理解のもとに、東洋学研究所の開設と同時に学祖の研究室も併置し、特に洋大八十周年記念に際しては、学友二名と共に、学祖の郷里や長岡高校などの視察にも行ったりして、筆者なりにこの研究には心掛けていたのであるが、誠に慚愧の至りながら、学祖哲学の真髄には充分触れるに至らなかつた。然し此度、第三部会研究員の御努力で、学祖の多くの著作も手にし、其の哲学の真相に接することを得たので、其の研究の一端を第一部会研究員の報告として呈出したのである。

所が最近神作学長から学祖研究会第二部会の「井上円了と西洋思想」の総合研究報告を頂いた。此に依り、斎藤

教授等八人の方々の研究成果の要旨を拝見する事が出来、ために更に多く啓発されるに至った。其の中で特に気が付いた点の一つは、学祖は東大在学第三学年の四月から「哲学要領」の原稿を発表し始める程、東西の哲学に深い理解を示されるに至っていたのに拘らず、東大の卒論としては、「人間の性悪は社会を善くする事に抛り矯正し得る」とする荀子の性悪説「讀荀子」を呈出された事に関し、其の意義を解明されておる事であった。此の義は一般に看過され易い面であるが、其の基本原理の説明は、学祖の人間観の内面を知るのに大切であろう。

次に学祖の理想であった東西文化の融合による新哲学の創立説は、決して単なる預言的思想と見る可きでなく、近代日本思想史の全面的見直しの一貫として再検討すべきであると注意されておること、並に、学祖が四聖の一人とされたカントは、十九世紀の英国新カント学流の解釈中に於けるカント観によるが、斯る見方は現在西洋でも再び問題化されていると指摘されていることである。最後に、学祖が現象即實在論を説き、「真如自体に存する力が物心両境を開き、萬象萬化を生ず」とせる点を解明し、更に現象上の概念と観の方法と、現象と真如との間に成立つ「相含」の論理観の重大性を指摘されるに至っている。實は此の最後の指摘こそ、学祖が、真如哲学説としての「物心同体論」或は「物如心如々相含説」を重視し、完全な中正哲学説として高唱された所でもある。而かも此の点は筆者が接した従来の学祖の紹介中では、充分な評価がなされるに至っていないかと思ふ。

以上の諸点から斎藤教授外七名の研究員諸士の「井上円了と西洋思想」研究成果は、誠に注目すべきであり、推奨されるべきであると確信するに至ったのである。

井上円了學術総合研究総括責任者
東洋大 学 名 誉 教 授